

令和元年度大阪府社会教育振興協議会 北ブロック研修会報告書

1 日 時 令和2年2月6日(木) 午後2時 から 午後4時30分 まで

2 場 所 箕面文化・交流センター(サンプラザ1号館)(8階大会議室)
郷土資料館(任意の見学会)

3 参加者 北ブロック(豊能・三島・北河内)の社会教育委員・社会教育関係職員
57名(別添名簿のとおり)

4 内 容

- ・ 開会の挨拶 箕面市教育委員会 藤迫 稔教育長

- ・ 事例報告及び講演内容

①「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」の取り組みについて

講師：箕面市立中央図書館長 大迫 美恵子 氏

箕面市立中央図書館 西野 あずさ 氏

➤ 配布資料①のとおり。公立図書館と学校図書館の連携についてや、アカデミー賞ができた経緯、令和元年度開催内容、オーサービジット等について紹介があった。

②「子どもは宝、みんなで子育て、社会であととし

～本に親しむ取り組みから～」

講師：千里金蘭大学 生活科学部児童教育学科 教授 黒瀬 哲也 氏

発表者：日根 真理 氏(人と本を紡ぐ会)

高岡 真仁 氏(西南小学校校長)

東谷 めぐみ 氏(西南小学校図書館司書)

山本 絵理 氏(箕面市PTA連絡協議会 萱野東小学校PTA副会長)

➤ 配布資料②のとおり。「子ども」と「本」をキーワードに、講師の教職時代の経験などを交えご講演頂いた。また、上記の箕面市社会教育委員(3名)と学校図書館司書(1名)の皆さんに日頃の活動などを発表して頂くことで、箕面市の取り組みを知って頂く良い機会となった。

- ・ 閉会の挨拶 吹田市社会教育委員会議議長 広瀬 義徳 氏

- ・ 郷土資料館の見学会

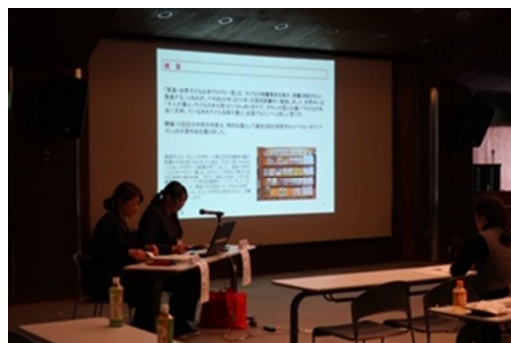
➤ 郷土資料館の杉山氏から、「くらしの道具展」の道具(昔使われていた振り子時計や黒電話、ハクキンカイロ等)について、小学校の見学会でのエピソードを交え説明があり、懐かしいといった声もある中、10名程度の見学会となった。

第1部「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」の取り組みについて

講師：箕面市市立中央図書館 館長 大迫美恵子、西野あずさ

1. はじめに（大迫館長）

子どもたちが本に親しむための取り組みのひとつとして、2010年から実施している「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」をご紹介します。



2. 「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」の取り組みについて（西野氏）

・概要（配付資料P2）

箕面・世界子どもの本アカデミー賞は、子どもの読書意欲を高め、読書活動をさらに推進することをめざして平成22年（2010年）の国民読書年に創設しました。世界中には「大人が選ぶ」子どもの本の賞はたくさんありますが、それらの賞とは違い「子どもが本当に支持している本を子ども自身が選ぶ」全国でもたいへん珍しい賞です。開催10回目の令和元年度は、特別企画として過去9回の受賞作から「ベスト・オブ・ベスト」の大賞作品を選びました。本市では、今から28年前、1992年から市立小中学校への専任の学校図書館司書の配置を始め、6年後の1998年には全小中学校への配置を完了しています。私自身も箕面の市立小学校・中学校に通っていたのですが、学校の図書館に足繁く通っていた当時は図書館に司書の先生がいるのが当たり前に思っていました。こうして図書館で働くようになり、専任の学校図書館司書がいることは決して当たり前のことではなく、贅沢なことだったのだとしみじみ感じます。専任の学校図書館司書が全小中学校に配置されていること、また、学校図書館で所蔵していない本は市立図書館から学校に貸出をして児童・生徒に提供できること、学校図書館司書と市立図書館司書の連携学習会を年に数回行うなど、日頃から連携・協力しているからこそ、これまで続けてこられた取り組みだと思います。

・「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」のはじまりについて（配付資料P3～5）

はじまりは、一校の学校図書館の取り組みからでした。学校図書館では、「図書館だより」紙上などで、その年、どんな学習をしたか、どんな本がよく読まれたかというふりかえりをするすることがあり、その学校で、ふりかえりとしてどの本がよく読まれたかを、映画のアカデミー賞になぞらえて発表していました。ある年、「講談社青い鳥文庫」の『若おかみは小学生』が人気で、その主人公を「主演女優賞」として「図書館だより」で発表したところ、「青い鳥文庫」の編集長の知るところとなり、編集長の方から「その賞を作家と一緒に学校にもらいに行くことはできますか？」という申し出があり、学校の許可を得て、急遽「授賞式」という形で、作家の令丈ヒロ子さんのオーサービジット（本の作家（＝オーサー）が学校などを訪問して特別授業を行うもの。）が実現しました。そのオーサービジットのプレゼンターは児童で、その後「記者会見」として会場に集まった児童たちの質問に、令丈さんは丁寧に応えてくださり、その質問の内容が、よく読んでいないとできない質問だったので、令丈さんも編集長も感激されていました。次の年もまた「青い鳥文庫」の作品が主演女優賞となり、それを編集長にお伝えすると、今度は石崎洋司さんが来てくださいました。この時もまた、児童の「この作品の舞台と、別のあの作品の舞台は同じなので

すか？」などと、たくさんの作品を真に楽しんでくれていることがうかがえる質問に、大変喜んでおられました。

このような取り組みが、現在の「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」のもとになっています。今は各部門のノミネート本に子どもたちが投票する形になっていますが、真に子どもたちが楽しんだ本が受賞し、受賞作家をお招きするという基本は当時のまま受け継がれています。

・スケジュール（配付資料P 6）

現在、どのようなスケジュールで実施しているか、簡単にご紹介致します。

2月頃に学校図書館司書・司書教諭・市立図書館司書などの実務者によるノミネート本選定会議を行い、前年に子どもたちがどんな本を楽しんでいたのか、貸出の多かった本や人気のあった登場人物など、それぞれが持ち寄った候補本から次年度のノミネート本を決めます。4月～7月は学校等でノミネート作品の紹介があり、今回のノミネート作品は、過去9回の受賞作品です。学校図書館と市立図書館でノミネート作品を発表し、展示や読み聞かせなどにより紹介します。夏休み期間は、各市立図書館に「アカデミーコーナー」を設けます。また、7月には市立小・中学校と市内の私立小・中学校の子どもたちによる投票があり、8月には各部門において大賞（「絵本賞」「作品賞」「主演男優賞」「主演女優賞」「ヤングアダルト賞」の5部門）を決定します。

11月は、子どもたち自身の運営による授賞式を開催し、受賞作家によるスピーチ等を行います。受賞者には、中学生手作りのオスカー像や市内の小・中学生が作者や主人公にあてた手紙が手渡されます。後日、憧れの受賞作家等をお招きし、市内小・中学校へ訪問してもらいます。

授賞式で作家にオスカー像などを贈呈するプレゼンターや司会は、その年の協力校の児童・生徒から募集しますが、ここ数年、子どもたちも積極的に立候補してくれており、ある学校では立候補者多数のため校内オーディションをしてメンバーを選出したという報告も聞いています。このように、授賞式の運営もほぼ子どもたち自身によって行われるのも「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」の特徴です。

・学校での様子（配付資料P 7）

図書委員などが中心となって、学校図書館にアカデミー賞の展示準備をしたり、ノミネートされた絵本に関連して、実物を見たりさわったりできる展示や、全校集会などで、図書委員の子どもらが全校生徒にノミネート本を紹介したり、大型本を使って読み聞かせをしています。

・令和元年度（2020年度）の結果（配付資料P 8）

約1万3,000人の小中学校の子どもたちが投票した結果をもとに、「箕面・世界子どもの本アカデミー賞第10回記念ベスト・オブ・ベスト」にノミネートされた本の中から、「絵本大賞」「作品大賞」「ヤングアダルト大賞」「主演男優大賞」「主演女優大賞」の受賞5作品を決定しました。今年度実施した第10回記念ベスト・オブ・ベストは、過去9回の受賞作から大賞作品を決めるということで、子どもたちもいつも以上に迷って投票してくれたようです。

・授賞式（配付資料P 9）

令和元年11月2日に子どもたちの運営による「箕面・世界子どもの本アカデミー賞第10回記念ベスト・オブ・ベスト」授賞式を行い、司会進行から受賞作家へのオスカー像贈呈まで、ほとんどすべての運営を市内の小・中学生が担当します。授賞式の受賞スピーチの

内容は、受賞者にお任せしているのですが、自身の子どもの頃のお話や、子どもの本を作る上での想いを語っていただいたり、スライドにイラストなどを映しながら作品の制作裏話やキャラクターの誕生秘話を直接お話しいただけることもあります。都合がつかず欠席の場合は、作者からのメッセージや自筆のお手紙を出版社の方が代理で読み上げてくださいます。



・オスカー像（配付資料P 10）

令和元年度のオスカー像は、箕面市立彩都の丘中学校創作部の部員が思いを込めて制作し、当日、受賞者に手渡されました。これまでのオスカー像は、粘土で作ったもの、ガラスに彫刻したもの、組木細工やスノードームなど形はさまざまですが、作品からイメージを膨らませ、子どもたちが思いを込めて制作しています。



・抽選会・サイン会（配付資料P 11）

授賞式の後には、受賞作品が当たる抽選会を行い、閉会后、ロビーでは受賞作家らによるサイン会を実施します。当日販売している本を買っていただくと、その本に目の前で作家さんらにサインをしてもらえます。作家さんと直接言葉を交わせるめったにない機会と、サイン入りの本という宝物ができるということで、子どもや保護者にも毎年好評です。

・これまで授賞式に参加された作家さんたち（配付資料P 12）

これまで授賞式に参加された作家さんたちの一覧です。第1回の2010年には取り組みの珍しさや、あさのあつこさんが受賞者として授賞式に来てくださるということで話題になり、大きく新聞記事に取り上げられたと聞いています。

・これまでオーサービジットで訪問された作家さんたち（配付資料P 13）

これまでオーサービジットで訪問された作家さんたちの一覧です。内容は児童数や会場となる教室の広さによって異なりますが、児童からの質問に直接答えていただいたり、こわい話で人気の作家さんですと、自分たちの学校の七不思議を考えてみよう、といったワークショップ形式で特別授業行っていただくこともあります。

・まとめ（大迫館長）

これまでこの事業にかかわってきて、感じるところとしては、受賞した作家のみなさんや出版社の方には、子どもが選んだということで何よりも評価をいただいております。あまり人前に出られない作家さんでも、授賞式やオーサービジットに来てくださっています。多くの子どもたちが作家さんと出会える学校へのオーサービジットの実施は、学校での要望も高く、各学校の協力を得て10年間続けてこられた大きな要因ではないかと考えています。読むだけでなく、作品世界をワークショップなどでさらに深く楽しみ、作家さんの話から創作の楽しさや難しさを感じているようです。作家さんとの出会いと子どもたちの心に残ったものがこの事業の大きな成果だと思います。

第2部「子どもは宝、みんなで子育て、社会であとoshi ～本に親しむ取り組みから～」

講師：千里金蘭大学 生活科学部児童教育学科 教授 黒瀬 哲也 氏

1. はじめに ～ 本は成長のエネルギー ～ (黒瀬教授)

箕面市で行われている数多くの取組みの中から、本に親しむ、特に子どもたちが本やお話しに親しむ取り組み、という視点から皆さんとご一緒に考えたいと思います。

箕面市の実践を紹介したいので、途中、3名の社会教育委員の方々、学校で図書館司書をされている方にもご登場願って、お話しをうかがう時間をとりたいと思います。

言うまでもなく、子どもは宝です。誰もが子どもたちのよりよい成長を願うわけですが、その成長にとって、本は欠くことの出来ないものだと考えています。

私の教職生活のスタートは小学校です。その時、取り組んだことの一つに学級文庫づくりがありました。いい学級文庫をつくりたいと思いました。



昨年のこと。私が、5・6年生を担当した教え子が、一冊の本を送ってくれました。メッセージには、「教室にはたくさん本がありました。中でも怪人二十面相シリーズを先生が教室において下さり、全部読んだことを思い出します。江戸川乱歩の世界を教えてください先生に別の探偵ものをご紹介させていただきます。」とありました。私は、これも学級文庫の縁だなど、小学校で学級担任をしていた頃を懐かしく振り返りながら、送られてきた探偵小説の世界を楽しみました。

怪人二十面相、少年探偵団シリーズ（ポプラ社）は、当時、心斎橋の商店街にあった古書店で目に留まり「これ、子どもたちは、喜ぶだろうなあ。」と思いながら20冊以上あったシリーズを全部買い、両手で抱えて帰った本です。30年以上たっても覚えていてくれるのだからとても値打ちがある、良い買い物をしたものです。

私は教師になった時、教室にたくさん本を置いて、子どもたちの中に本を読む、楽しむ、という文化を育みたいと思いました。そして「この本、もう読んだ?」「面白いよ。」そんな会話が自然に生まれる教育環境に憧れを持ちました。

本との出会いが子どもたちの心を豊かにし、読んだ当時の思い出とともに、大人になっても鮮やかな記憶とし残ることは、私自身の経験もさることながら、大学生を対象にしたアンケートの結果からも読み取ることができます。少し紹介します。

Aさんは「どんなにきみがすきだかあててごらん」という本が心に残る一冊ですが、彼女にとって、母親に読んでもらった記憶がよみがえる一番の絵本です。子どもはいつか巣立っていきますが、この本を通して、あらためて親の愛情を実感し、思い出すことでしょう。「読み聞かせ」など、本を介した親子の時間の大切さも伝わってくるエピソードです。

Bさんの印象に残った本は、「おいしいのぼうけん」です。本人の回想からは、本を通して空想と現実の世界を行き来する子どもの様子がうかがえます。主人公になりきって「ハラハラ、ドキドキ」しながら読み進める姿は、「相手の立場になって考える」「役割取得」など、道徳性の発達にとっても重要な側面を持つのではないかと思います。

Cさんの一冊は、「バムとケロのそらのたび」です。彼女が子ども時代に、とても気に入って、何度も読んだ絵本だそうです。いつまでも魅せられる、子どもが、何度手にとっても見飽きることのない作品は、素晴らしい絵本の条件なのかもしれません。

しかし誰もが、「子ども時代の心に残る一冊」を持っていると限った話ではありません。

とくに義務教育の現場には、様々な生活環境を抱えた子どもがいます。

以前、「遺産相続者たち ― 学生と文化」(ピエール・ブルデュー、クロード・パスロン共著)という本を読んで衝撃を覚えたことがあります。子どもは親から多様な文化を相続します。しかし、文化や教育との親和性など身体化される貴重な財産を受け継ぐことの出来ない子どもたちがいるとしたら、またそれが現代社会の教育問題の一つでもある子どもの貧困や教育格差の再生産につながるとするなら…。私たちにできること、社会が果たす役割について考えさせられる課題です。この問題は、子どもたちが本に親しむ環境づくりや読書活動の取り組みと決して無縁ではありません。

「本は成長のエネルギー」です。一冊の本との出会いがもつ価値を感じて頂けたでしょうか。ではここで、本が好き、人が好き。そんな大切な本やお話の世界と人を紡ぐ活動をされている「人と本を紡ぐ会」代表の日根真理さんに、箕面市の図書館を中心に行われている活動についておうかがいしたいと思います。

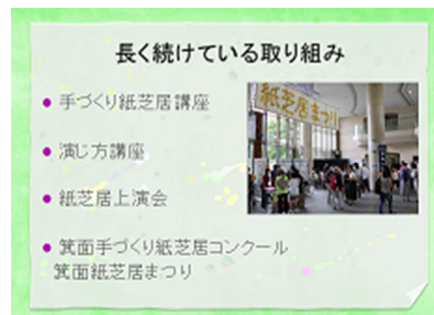
日根さんよろしく願いいたします。

2. 「人と本を紡ぐ会」の活動をとおして (人と本を紡ぐ会 代表 日根 真理 氏)

「人と本を紡ぐ会」の活動の中で特に箕面紙芝居まっりの取り組みなど、子どもたちと一緒にしている活動をいくつかご紹介します。まず、簡単に当会の紹介をいたします。2000年5月に市民の中からの運動として、図書館をベースに活動をしていく箕面市版NP0として産声を上げました。元は、長年、紙芝居まっりの事業委託受け、実施していた団体を中心となり、それ以外の市民も巻き込んでスタートしました。

図書館が好き、本が好き、人が好き、が活動のコンセプトで、そんな方たちが集える場所を作りたい、そしてそんな人を増やしたいと思っています。

行っている事業の中で、特に子どもたちと一緒にしている活動の主なもので、ずっと長く続けているものが紙芝居関係のものです。



・手づくり紙芝居講座

午後1～4時を5日間の講座で、ここ数年、夏休み中に開催しています。

はじめに紙芝居を見る、お話を考える、絵を描くという順で作っていきます。そして、できあがった紙芝居を発表して、はじめて世界で1つだけの紙芝居が完成します。

一番最初には紙芝居をたくさん見てもらいます。紙芝居をいっぱい見て、楽しんで、どんな紙芝居を作ろうかな～とここでイメージを膨らませてもらい、そしてその膨らんだイメージをお話にします。子どもたちはフシギとか魔法が大好き。大人には思いつかないような突拍子もないお話を思いついたりして、周りの大人たちもとても楽しい時間です。

次にストーリーを考えますが、登場人物のセリフでお話を進めていかないと面白くないので、脚本作りが大事になります。それができたら、絵を描きます。



まずは「コマ割り」でみんな熱心に絵と絵に合わせて、このシーンにはこのお話とセットで考えていきます。コマ割りができあがったら、先生に見てもらってからみんなの前でお披露目します。次はいよいよ紙芝居の大きさに絵を描きます。下書きをして、色塗りをして仕上げですが、根気がいる作業です。

この講座はいつも図書館併設の会議室や美術室などで行っていますが、図書館がそばにあるのがいいのです。わからないことがあれば、本を借りてきて、こんなふうに確認ができます。



いよいよ紙芝居が出来上がったら、講座の最後の締め、全員が自分の紙芝居を披露します。世界に1つだけの紙芝居を演じるのはちょっぴり恥ずかしそうですが、とても誇らしげです。

・演じ方講座と紙芝居上演会

これは演じる講座で、紙芝居をする子どもやおとなを増やしたいということから始めました。演じる講座の集大成としての上演会では、出てくれる子、いないかなーという感じで、子どもたちに、お声掛けをして出演してもらいます。先生もお手本を見せてくれますが、やっぱり先生のはおもしろかったり、小2のお姉ちゃんについてきた4歳の妹ちゃんも、手づくり講座に来て一緒に作り、上演しました。こんなのも嬉しいことです。

箕面市立第3中学校演劇部の生徒さんも毎年、箕面紙芝居まつりにも出演をしてくれています。また、小学生のときに手づくり紙芝居講座に来てくれていた現在、高校1年生の女の子が、中学校を卒業して高校に行くまでの間の春休みに、「暇やなあ、何しようかな、そうや、暇やし久しぶりに紙芝居でも作ってみるか」と思って作り、コンクールにも応募してくれた作品が、今年度の一般の部B部門で最優秀賞を受賞しました。活動のつながりを感じた、嬉しい出来事でした。

・コンクールと箕面紙芝居まつり

これは、今年度のコンクールとまつりの写真です。上は、いよいよこれから審査会ということで、上演前にドキドキしているところで、下は表彰式です。前列にジュニアの部の受賞者が座っています。箕面紙芝居まつりでは、はがきサイズの小さいものですが、ミニ紙芝居づくりコーナーを開催しています。子どもたちは一生懸命に絵を描いたり、お話を考えたり、そして「こんなお話～」とやってみせてくれます。



(今年度のジュニアの部 最優秀賞の作品を上映)

あれ、さっきの子は…と思われませんでしたか？先ほど、しっかり図書館の本を見て、しっかりペンギンを観察して絵も丁寧に描いています。



最後に、こんなのかなと初めた取り組みをご紹介します。平成16年度から「赤ちゃんから楽しめるコンサート」を始めています。最初はジャズピアニストの石田ヒロキさん(箕面在住のプロの方)に「赤ちゃんから」というコンセプトでコンサートをしていただきたと申しましたら、快諾していただき、それ以来、年1回、演奏していただいています。昨年6月にはクラシックもいいよね、ということで、フルートとギターの演奏を同じく「赤

ちゃんから」を対象に開催し、たくさんのお子さん連れで賑わいました。お子さん連れの方にはゴザ席をご用意し、くつろいで聴いておられる様子を見ていただけたかと思います。お子さん連れでも遠慮なく来られる場が図書館にあるよ～、ついでに図書館にも寄ってって～というきっかけづくりになればと思ってはじめてみました。



・まとめ

私たちが子どもたちと一緒にしている活動の一部をご覧いただきましたが、元気な箕面っ子の姿をたくさん見ていただけたのではないかと思います。最後に、図書館ではいろいろな出会いがあります。まずはやっぱり「本との出会い」。探していた本、読みたい本との出会いは格別です。そして、「知識や情報との出会い」。知りたいことを知る喜び、これも格別です。でもそれプラス「人との出会い」。これを私たちは大切にしたいと思っています。本がいくらあっても、やはりそれを手渡す人が必要です。その手渡し人、きっかけをつくる人になればいいなと思って活動しています。

3. 学校における取り組みと学校、家庭、地域の連携（黒瀬教授）

最近、日本の子どもの学力の基盤である読解力が低下している。そんなニュースを目にした方も多いと思います。2018年度の国際調査で、日本の15歳の読解力は大きく順位を下げたと報じられています。背景には、本や新聞などでまとまった文章に触れる時間が減少しているからではないかなど様々な分析が行われています。子どもがまとまった文章に親しむということは大事な成長の糧です。子どもの心を豊かに育む、そして読解力の育成、思考力、想像力をつけるという視点からも本との出会いは大事にしたいと思っています。はじめに学級文庫の話をしました。校長になってからも読書活動には力をいれました。例えば、読書タイムの取り組み。先生も子どもたちも一緒になって本を読む、本の世界を楽しむという取り組みです。

ただこれを学校全体の取り組みとするには、本の冊数を確保するなど準備と話し合いが必要です。もう随分前の話ですが、当時子どもが1100人ぐらい在籍する大規模校で始めたことがあります。読書活動の推進には重要な2つのポイントがありました。

- ①まず中心になる学校図書館の充実を図り、あわせて学級文庫の本を増やします。行政のサポートを受けるためにも、学校の読書活動の取り組みには力を入れます。
- ②読書活動の一環として家庭、地域と連携します。例えば、地域のボランティアの皆さんによる「朝の読みつたえ」を始めました。読みきかせではなく、読みつたえとしたのは、「読んでつたえる。言葉でつたえる。心をつたえる。」というボランティアの方々のモットーと熱意からきています。お話しに聞き入ってくれる子どもたちの姿に励まされ、この取り組みは15年を経た今でも続いているそうです。素晴らしいことです。

学校の読書活動は、教職員や保護者、地域の方々の取り組みと協力でスタートしますが、不足していた学級文庫の本はPTAと相談し、古書店から百冊単位で買い集めることになりました。購入は連携してバザーを行い、その収益を当てるなど、様々な知恵を絞りました。始まりは一寸したことでも、学校の取り組みは広がり、子どもたちに与える影響は大きいと思います。そして、とてもダイナミックな実践。市内全体の行事にまで発展した事例が、第1部で報告のあった「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」ですが、各学校において、読書についてのセンター的機能を果たすのは何と言っても学校図書館です。また学校図書館は、大切な子どもの居場所としての役割も持っています。

とくに箕面市は、全ての小中学校の学校図書館に学校図書館司書が配置されていて、児童、生徒たちの成長を支えています。

では箕面市小中学校校長会の高岡真仁校長先生と学校図書館で司書をされている東谷めぐみさんから、箕面市の学校図書館の運営、取り組みについてお話しいただきます。

よろしくお願いいたします。

4. 箕面市の学校図書館に司書が配置された経緯や運営、取り組みの紹介など (西南小学校 高岡真仁校長、学校図書館司書 東谷めぐみさん)

はじめに（箕面市立西南小学校 高岡真仁校長）

西南小学校の校長の高岡です。公立小中学校の学校図書館のお話を本校の学校図書館司書の東谷とさせていただきます。こういう話になると「箕面だからできる」、「さすが箕面」とよく言われることがありますが、近隣の市町村にも箕面にはないそれぞれ良い取り組みがたくさんあって、気づかされることがあり箕面でも真似できないかと行政の方と話をすることもあります。私から次の世代を担う若い教職員たちに研修会などで話すときには、何ができるのか、次の世代として何を生み出せるか考えて欲しいと伝えています。私は箕面にずっと住んでいますが、今では学校図書館と言われていますが当時は図書室と呼ばれていた時代で大阪万博の後でしたが、どんどん校舎を建てていて、校舎が足りずプレハブであった時でも、図書室はありました。

子供にとって生まれてから、本との関わりは読み聞かせで、読み聞かせができる家できない家があるけれども就学前の学校に行くまでの子どもにとって、見て聞いて話せるようになる土台の1つには子供の頃の絵本の読み聞かせがあり、学校での勉強につながっていると思う。学校では、読み書きそろばんと昔から言われて大事にしているが、文部科学省ではアクティブラーニングや活動的な学び、主体的、自主的な深い学びなど、学習指導要領でも大切と言われている。その土台の1つに本があると思っていて、本は大事な土台であるが、その向こうに人がいる。その向こうに見えるものを教職員にも感じ取って欲しいし、子どもにも感じてもらいたい。その学校で本と出会える場所、学校図書館の話について、学校図書館司書の東谷からさせていただきます。



箕面市の学校図書館について（箕面市立西南小学校図書館司書 東谷めぐみ氏）

箕面市に学校司書が配置されたのは、今から28年前、1992年の4月です。まずひとり配置され、その後6年かけて小、中学校全20校に学校司書が配置されました。配布しております「箕面市の概要」に記載しています。

学校司書の配置には、先ほど報告された「人と本を紡ぐ会」を立ち上げた市民の方々の力によるところが大きいのです。子ども文庫やおはなし会をされていた市民グループが、「学校図書館に人を」という市民活動を始められました。同時に、学校の中でも、学校図書館の充実を願った先生方が、当時先進的だった岡山市に視察に行ってくださいました。市民と教職員が「箕面市にも人のいる学校図書館がほしい」と声をあげたのです。そして、その時行政も、その声をしっかり受け止め、子どもたちのために人のいる学校図書館を実現しようと動いてくださいました。

市民、教職員、行政がその思いをひとつにして実現できた、自画自賛になりますが、すば

らしい施策だと思います。学校司書は、公共図書館の司書資格をもつ者が配置されました。

私たちがしてきたことは、学校の中で図書館サービスを日常的に行うことです。

まず、終日開館です。朝から放課後まで、児童生徒がいる時間には開館していて、いつでも利用でき、もちろん本の貸出返却は基本です。レファレンスと言いますが、調べことを支援したり、読書相談として本を紹介したり、書架をまわって一緒に本をさがしたりします。

リクエスト、予約サービスを活用して、今ここにはない本でも、購入したり、他の学校や市立図書館から取り寄せて手渡します。こうして、子どもたちの「見たい」「読みたい」「知りたい」に応えています。

箕面市では、小学校の全学年全クラスに、週1時間、図書館を利用できる「図書の時間」が割り当てられています。基本、子どもたちは毎週図書館にきて、司書の読み語りや、おはなし、本の紹介などを楽しまします。の後は、読書の時間になります。また、図書館で調べ学習を行ったり、図書館の本を使って教室での学習をすすめたりもします。中学校では図書の時間はありませんが、休み時間に読書を楽しんだり、授業で調べ学習を行ったりしています。

司書は、図書館の使い方を随時伝えていて、具体的には、分類された本がどのようにならんでいるか、知りたいことが載っている本をどう探したらいいのか、もくじや索引のこと、百科事典や年鑑の使い方などです。

また、興味関心を刺激したいと、展示も行っていて、季節の本や行事、学校のとりくみにあわせていろいろな分野の本を展示することで、今まで借りられていなかった本がよく借りられるようになっていきます。先ほどの「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」もそうした読書をすすめる日常の活動の中のひとつです。



この図書館サービスを支えるために、なくてはならないものが図書館ネットワークです。箕面市の学校図書館は、学校間、市立図書館との連携を充実させて参りました。この場合、物流が問題になるのですが、子どもたちの学びのために、さまざまな人の協力を得て、今では、配本を学校などの書類と一緒に、毎日行っています。メールでやり取りした本が、早ければ翌日、遅くとも3、4日で届きます。物流が整うのには数年かかりましたが、今では、おそらく日本一の図書館ネットワークに支えられ、確実な資料提供ができていると、これも自画自賛しています。

お配りしている「学校図書館紹介リーフレット」の後ろに学校図書館司書の私たちがめざしていることをまとめています。

「学校図書館は、小・中学校の9年間、子どもたちの興味・関心をよび起こし、子どもたち一人ひとりに、求める資料をとどけます。学校図書館司書も教職員の一人としてともに手を取りあって、豊かな学びの場をつくります。そして、すべての子どもたちが、数ある情報の中から自分に必要なものを選ぶ力を身につけ、生涯にわたって、図書館を活用していくことのできる「人」に育ってほしいと願っています。」

5. 子どもたちの心を満たす ～ 子育て支援の視点から ～ （黒瀬教授）

箕面市の学校図書館では、図書館司書が配置されていることで、人と人の温かいふれ合いが生まれ、子どもたちの居場所として、無くてはならない場になっていることが分かります。また市立図書館との連携や配本サービスなど、学校図書館の運営を支える様々な努力もうかがうことができました。このように、本は子どもの心を満たし、時に心の隙間も埋めるものです。



ところで皆さん、14万4千。何の数字かお気づきですか？単位を付けると。14万4千人。2019年度に文部科学省が発表した不登校児童生徒の数（全国）です。不登校の要因というのは、勿論様々ですが、子どもに関わる課題を解決するには子どもに直接働きかけるだけでなく、子育て支援、親と一緒に考えるという姿勢も含めて、子育て支援の視点が必要です。この問題と向き合い、私は、子育て支援の必要性を強く感じたことが幾度かありました。ひとつ事例を紹介します（事例は割愛）。

子どもの気持ちがしんどくなった時、その子の気持ちにどうやって寄り添えば良いのか。またそうならないためにも、子どもと向き合う時間の大切さは言うまでもありません。親が、子どもと向き合う時間、「ゆとり」をどう社会全体で支えることができるのか？これは大きな課題です。私たちに出来ることは何か？子どもの教育と子育て支援は、切っても切れない関係にあるのです。

また、いろんな理由で心寂しい子どもがいたら、例えば「転校して学校になかなか馴染めない子」「友だちと仲直りができない子」「家庭で、しんどいことがある子」「運動や勉強が苦手な子」など、そんな子どもたちの心を元気にする試みの一つに、子どもが本に親しむ取り組みが位置づいているようにも感じます。先程の学校現場からの報告にもあった様に、読書活動を通じて、友だちとの輪も広がると思います。

子育てについて、日々、親御さんたちが悩まれることは多いと思います。では親の目線から、箕面市PTA連絡協議会の山本絵里さんに子どもと本、子育て支援について、ご自身の経験や日頃感じておられることなどを語っていただきます。よろしくお願いいたします。

6. 子どもと本、子育てを支援する取り組み等について親の立場からの意見など （箕面市PTA連絡協議会 萱野東小学校PTA副会長 山本 絵里 氏）

私は現在、小学5年生の長男を筆頭に、3年生次男、1年生長女、間もなく3歳になる三男の計4人の子育ての真っ最中です。

年の離れた四人を連れていける公共の場所といえば、大人一人に子ども二人までという縛りのある市民プール等は無理ですし、おのずと主人のいない休日は公園や図書館。私自身、昔から本を読むことが好きなので、子どもたちにも、とにかく絵本に親しみのある生活を送ってもらいたいと思い、図書館には比較的通う生活を送っています。4人目の三男が生まれる前までは、寝る前に子どもたちがそれぞれ選ぶ本を一冊づつ、川の字に並べたお布団に入らせた状態で読み聞かせしていました。四人目出産後はなかなかうまく時間も取れず、やっと最近また一冊だけですが寝る前の読み聞かせを再開できる日も出てきました。



寝る前に本を読むことで、日中こちらの都合で必要以上に怒ってしまったりしたことなどもなんだか帳消しになるような気が私自身勝手に感じていまして、子どものためというより自分の気持ちの問題で、終わりよければすべてよしっ！みたいな感覚で、読みたいと思う日

が多々あります。ただ、子どもにとっては、本を読んでもらっているその最中に眠りに落ちることはとても気持ちの良いことのように、「お話読んでもらいながら寝るのって最高～」と言ってますし、お互いにとっていいことなのかなと私自身解釈し、なるべく時間をとれるように努力はしている最中です。

書店に足を運んで、購入し、自宅で思う存分楽しむこととは別に、やはり数多い蔵書に触れる機会のある図書館は貴重な場所です。その中で、私個人の親目線での箕面市の図書館のいいなと思う点は二つ。

一つ目は、子どもが過ごしやすそうな場所であること。飲食ができるスペースがあったり、子どもが寝転んで本を読んでいたりと。時には保護者もごろっとなり、読み聞かせをしたり。特に飲食可については本当に驚きました。私の周りには、転勤や引っ越しで箕面市に移ってきた方も多く、つい昨日もその話題になったところです。紙ベースの媒体を扱う場所にもかかわらず、これはとても驚くこと、しかし、少しでも長い時間過ごしたいと思えば、お茶の一つ、お菓子の一つをつまめれば子どもにとっても居心地のいい場所です。

二つ目は、蔵書の検索システムが、ひらがなを習い始めた子供にとってもすごくわかりやすいこと。読みたい本のキーワードを打ち込んだりしながら、楽しそうに本を探します。お目当てのものではなくとも、そこでまた新しい出会いもあるのではないかと、次はどんな本を見つけてくるのだろうとこちらもワクワクして見えています。

また図書館の取り組みもおもしろい。先ほどのお話にもあった「箕面・世界こどもの本アカデミー賞」。子どもたちは、今年は何の本がいいかなと家でもその時期になると会話に出ます。昨年秋にあった授賞式は、わが子たちの通う学校がプレゼンター担当校ということで、息子もオーディションに応募いたしましたが残念ながら、見事落選してしまいました。ただ自分たちが本を選ぶだけにとどまらず、子ども達が実際舞台に立ち、プレゼンターをつとめたりするお仕事を任される、大勢の人の前で何かをする、とてもいい経験だと思います。また、今まで知らなかった本も大人が芥川賞だ、直木賞だと毎年発表されれば読んでみようかな、という気になるようにきっと子供たちの食指もうごくはず。そこでまた新しい本との出会いを促すいいきっかけにもなっていると保護者目線では感じています。

図書館に司書の先生が常駐して下さっていていいなと感じたことが今年の1学期の終わりのころにありました。1年生になったばかりの長女が、ある時、お昼休み校庭を所在なさに歩いており、その姿を目撃した兄が、その日の夕飯時に妹にしたアドバイスが「もし、誰とも遊びたくないな一つて思ったり、遊ぶ人がいなかったりしたら、図書館行ったらいいねん。」「図書館には先生がいて、面白い本もいっぱい紹介してくれるで」と。

子どもにとって、学校は長時間過ごす外の世界です。気持ちに余裕のないとき、少し一人になりたいとき、手持ち無沙汰な時、学校図書館という空間が子どもたちのそばにあるということを感じているんだなと思いました。

先ほどの人と本を紡ぐ会 日野さんが西南図書館で主催なさっている、子ども連れで楽しめるコンサートも、生の演奏が聴ける、子どもにも体験させてあげられる親としてはありがたい場所だと思います。また、図書館で開かれることで、普段静かでちょっと敷居が高いかなと感じる小さいこどもを持つ保護者も図書館に立ち寄り、一冊でも二冊でも絵本を借りてその場で、または自宅で子どもと楽しむことにつながります。

子どもは予測不可能な時に泣いたり叫んだりすることもありますし、私たち親も何人子どもを持ったとしても、個性がありますので毎回初めての体験です。とくに、周りに頼れる親戚等がいなければ、子育てにつかれてしまうことも出てきます。こういった活動が静かなイメージの図書館という場で開催され、それが周知されることで、親にも子供にも余裕が生まれ、より子育てしやすい環境が広がっていけばいいなと思います。 子育てを経験

された先輩方に言わせれば、子育ての期間は一瞬で過ぎてしまう一番充実した時のようですが、その真ただ中にいる私たちには毎日が嵐のような日々です。図書館だけでなく、親も子どもも楽しめる公共の場所が増えることは、子育ての大きな応援団が増えることだと思います。増やすだけでなく、情報も提供してもらえる機会があれば、利用する方々も増えていくと思います。私自身の経験も個人の経験でしかなく、本と子育ての視点からのお話になりましたが、本はこどもにとって、経験したことのない世界を知る手段ですし、親からしても、伝えたいことを間接的に伝えたりもできるステキなツールでもあると感じています。本や図書館を通じて、子どもたちが、子どもの世界を思う存分楽しみ、それを大きな土台として成長していく姿を親だけでなく社会として支えていけたらいいと感じています。

7. おわりに（黒瀬教授）

私は、自身の校長時代、トータル5年間、朝、正門のところで子どもを出迎えていました。毎日、子どもたちから教えられ、気づかされることも多いからです。

4月の1年生、こんなこと聞いてくる子がいます。1年生の男の子が、私にたずねます。

「校長先生？」「何かな？」皆さんなんて言ったと思われますか…？

「校長先生？」「何かな？」

「今、何時。」と聞くのです。「8時5分かな。」と答えると、子どもがまた聞くのです。

「ぼく遅れてない。」って。

この気持ちは、ずっと大切にしたい。子どもの一生懸命の原点を見る気がします。1年の希望は春が決めると言いますが、義務教育9年間の希望は、1年生が決めるのです。

「ぼく遅れてない」これは大事な一言です。

こどもは皆、勉強したい、大きくなりたい、と思って一生懸命生きている。

この子ども観というか、子どもという存在をどう観るか。これこそ「教育で大切にしたいこと」です。子どもは、どの子も学びたい、よくなりたいと願っています。そんな思いで一生懸命生きている。だからこそ良いものに、沢山出会わせたいと思います。

本との出会い、人との出会い。子どもは宝です。そして、みんなで子育て。これは日本の社会の良いところです。みんなで子育て。社会であとおし。これからも、みなさんと一緒に、取り組んで参りたいと思います。ご清聴ありがとうございました。